

記憶と記録
—現代情報メディアにおける他者の可能性について—
Logs and Memories
: The Possibility of Personal Subjectivity
in the Modern Information Media

吉田 健彦

YOSHIDA, Takehiko

はじめに

多くの言葉が濫用され、消尽されていく。先の大震災後、異様なまでに声高に語られた「絆」なる言葉もまた、それが本来持っていた意味を失ってしまった。「3.11」や「フクシマ」なる表現もまた同様に、どうしようもなく受け止め難い無限の苦痛を記号化し、消費できるありふれた客体にしてしまう。それは要するに、そのひとつひとつが絶対的な固有性を持っていたものごとの喪失から、我々が目を逸らしているということを意味している。そしてそのような逃避が Twitter などの現代情報メディア⁽¹⁾と結びつくとき、我々が受け止めるべきであった真実は覆い隠され、「3.11の悲劇を絆によって乗り越えていく私たち」という、見せかけだけの希望に彩られた物語が作られていく。

メディア上に溢れるそれらの言説を目の前にして、我々はどこか暗澹たる気持ちになることはないだろうか。単に美談として語られる「絆」なるもの。けれども実のところ、それは我々の空虚さを一時埋めるためだけに生みだされた、それ自体空虚なイメージでしかない。我々はそれを消費し、すぐに欠乏し（なぜなら事実は変わらずに在り続けるのだから）、より分かりやすく、より陳腐な「絆」の物語を求め

ていく。しかしそれはまったくのナンセンスでしかない。絆とは本来一般化できない、それぞれに固有なひとりとひとりの間にのみ生まれる、絶対的に固有な関係性のことを意味している。それはきれいごとでは片づけられない、生々しい、厭わしさや煩わしさ、苦しささえをも含んでいる、怖ろしいまでに逃れようのない他者とのつながりなのだ。それらの苦痛や恐怖を濾過してしまった後に残されるのは、ただ他者を自己の快楽のために消費しようと食欲に涎を垂らし続ける己の醜い姿でしかない⁽²⁾。

本論が前提とするのは、この、他者が私の存在に対して及ぼす根源的な恐ろしさであり、苦痛である。ただしそれは避けるべきもの、避け得るものではなく、そのなかにとどまることによってのみ私の存在が可能となるような恐ろしさであり、苦痛でもある。しかし我々はそれを遠ざけ、他者を記号化し、消費対象にしようとする。その醜さは決してインターネットによってのみ顕在化されたものではなく、他の様々なメディアによっても、あるいは対面関係を通してでさえも、我々は常にどこかにそのような醜さを隠し持っている（痛みを拒否する我々の声高な「絆」の叫び声は、まさにこの醜悪さを覆い隠すための白く塗った墓に過ぎない）。

現代情報メディアが、このような虚飾と極めて高い親和性を持つことは確かであろう。しかし、やはりそれだけではない。現代情報メディアが我々の関係性を仮想化し、他者を消費の対象とする大きな力を持つからこそ、我々は逆説的に、そこになお消し去りがたく残された他者からの衝撃に気づくことができる。

本論では、現代情報メディアが他者との真の関係性、共同性を可能にし得るのかどうかを、記憶や苦痛に焦点をあてつつ考察する。その際注意しなければならないのは、これらの情報技術に対して純粹素朴に否定的であろうとすることには何の意味もないということである。むしろ、これらの技術が決定的に避けがたく我々の生活に浸透し、透明化していくと考えるからこそ、その影響を分析しなければならないのだ。

1 記憶と記録

震災を機に、改めて様々なメディアによって残された記録の重要性が認識されるようになった。共同体が持つ固有性が、そこで共有されていた記憶によるのであれば、津波によって、あるいは放射能汚染によって喪失された記憶を支えるものごと（そこには人間も含まれる）は、そのまま共同体の喪失を意味する。例えば、津波や地震、竜巻などの自然災害があった後、そのとき失われた家族の写真が遠く離れたところで見つかり、それが持ち主の手に戻ったという話を、我々はしばしば耳にする^③。多くの場合、そこでは、取り戻された写真は単なる記録ではなく、災害によって喪失された何らかの記憶の回復を意味している。また、例えば 1854 年の安政南海地震について記した瓦版が、単に過去のできごとを伝えるだけではなくこれからの防災にも活かし得る

ものとして注目されたように、災害前後における被災地の状況を記録することは、やがてまた起きるかもしれない災害に備えることにもつながるかもしれない。

これら自体は、非難されるべきものではない（特に写真が持つ記憶の可能性については第 2 章で改めて考察する）。しかし、もし我々がそこからさらに一歩踏みこみ、日々の生活において生まれるすべての情報をデジタルデータとして記録するとしたらどうだろうか。実際、我々はそれをある程度実現できる時代に生きている。今回の大震災と原発事故における特徴のひとつとして、被災地が先進的な情報技術に溢れた日本であり、かつ情報インフラの拠点である東京からそれほど離れてはいない東北地方であったということがある^④。その結果、現代情報メディアを通して、これまでの災害と比べはるかに多くのものごとが記録され、共有されることになった。吉見俊哉ら（2012）は、これらの経験を通して、現代情報メディアによって記録された情報のアーカイブ化の重要性を主張している。その目的は上で述べたように、将来への備えと共同体の回復の二点にある。しかし、アーカイブ化のためであれば個人の権利は無視しても良いとでもいうかのような吉見の議論には、強い懸念を抱かざるを得ない。確かに吉見が指摘しているように（同書：20, 31, 146 等）、公共の利益が優先されるべき場合もあるかもしれない。しかし、共同体回復のため、あるいは災害予防のためといった（正面からは批判しにくい）大義名分を掲げることによって、我々の個人情報や普段から何らかのシステムによって集められ、ビッグデータ^⑤として管理されることは、吉見が考えているよりはるかに大きな危険性を持つだろう。そしてその危険性への対策としては、せいぜい法的制度の確立

やアーキテクチャ設計によるしかない。また指摘するまでもないが、個人情報の保護は政府や企業の情報隠匿を許すこととはまったく異なる。しかし少なくとも吉見の論述がその差を明示しているとは言い難い。

しかし本論が問う点は別にある。第一に、もし情報アーカイブの目的のひとつが共同体の復興にあるというのなら、そもそも、公共の利益のためには個人のプライバシーを尊重する必要はないというのは矛盾でしかない。何故なら、共同体とは、あるひとりひとりの、絶対的に固有な人間関係が無数に組み合わせるなかで生みだされるものであり、その私ときみの絶対的に固有な関係性は、人間にとって最も私的なものだからである。従ってここでいうプライバシーとは、単に法やアルゴリズムによって定められるような個人情報のことではない。そして第二に、そもそも現代情報メディアによって記録されたものが、はたして本当に共同体の記憶になるのかということも問われなければならない。無論、あるひとつのメディアが、我々の日常生活すべてを記録することなどあり得ないし、仮にできたとしても、そのすべてを分析することは不可能であろう⁶⁾。従って、不完全性それ自体によって現代情報メディアによる記録が否定されることにはならない。そうではなく、逆に我々が現代情報メディアによって我々の日常生活すべてを記録することができると信じ、かつそれが記憶になると信じていること、あるいはそうであるよう欲望していることにこそ問題の本質がある。そしてそれはいつか、デジタルデータとして記録されるものだけが我々の生であるという逆転を生みだすことになる。

現代情報メディアによる記録は、今後ますます莫大な量となり、かつ低コスト（それは単に経済的な

コストを意味するだけではなく、我々が記録するという行為を意識化する必要がなくなっていくということでもある）になっていく。それに比例して、デジタルアーカイブの重要性も高まっていくだろう。しかしそれだけのことであれば、結局のところそれは、人間の固有性から完全に切り離されたどこかで自律的に作動し続ける、不気味な何かにしかなり得ない⁷⁾。我々自身もまた、不死への欲望を通して、記録されることと記憶していくことの差異を失っていくのであれば、最終的にはビッグデータとして（すなわち総体として）の交換価値しか持たない、ただの01のビット列と化すより他はない。

問題の根底はここにある。大黒（2014）は、ビッグデータにおいて「個々のデータの値やデータの帰属先である個々の標本は本来、関心の埒外」（同書：136）であるから、プライバシーは本質的な問題とはなり得ないという。これは正しいが、しかしそれが示しているのは、いうまでもなくプライバシーについては心配する必要がない、などということではない。そうではなく、ビッグデータが（人間自身の欲望によって）人間の主体性を飲みこみ、それ自体で自律的な運動を始めるとき、プライバシーを持つ人間が——少なくとも我々がいま指しているような意味においては——もはや存在しなくなるということの意味しているのである。注5で触れているように、ビッグデータにはVeracity（正確さ）あるいはValue（価値）という属性があるという主張に対して、大黒は、ビッグデータはそもそも「「無差別」に掻き集められたデータの集積物」（同書：138）であり、そこに正確さや価値は存在しようがないという。しかし、正確さと価値は、必ずしも並列されなければならないものではない。我々の周囲で既に環境化した情報技術⁸⁾は、無意味に（確かに

そこには国家や企業の恣意が働くが、技術はやがてそれを凌駕してしまう)、しかし正確に我々の生活を記録していく。そしてそれは、正確であるにもかかわらず無意味であるからこそ不気味なのだ。西垣が指摘しているようにビッグデータにおいて「個が軽視されている」(西垣 2014: 46) のは事実だが、事態がここまで進んだとき、もはや軽視される個さえ存在しなくなる。

しかしそれでもなお、そこには何かが残る。人間存在が、ある面において自律的に運動する技術なしにはあり得ない以上、そこに残された何かを技術もろとも否定し、純粹無垢な人間性などという幻想に戻ろうとすることは不可能であり、現実的な応答の可能性を失うだけにより一層の危険を人間にもたす。必要なのは、どのようなメディアを通してであれ、それを貫いて我々に迫ってくる他者とはいったい何なのかについて、粘り強く問い続けることなのではないだろうか。

2 我々に迫ってくる他者

現代情報メディアの出現によって、我々は個人のレベルにまで分断された安全な空間から、画面越しに世界に起きている様々なできごとを眺めることができるようになった。画面の向こうにどこか遠くの他者の苦しみ、悲しみ、あるいは恐怖が映しだされる。我々は束の間それに同情し、共感し、あるいは社会の不正に怒る。そして別の娯楽を提供してくれるであろうサイトへのリンクをクリックし、数秒後には既にすべてを忘れていく。直接的な対面関係が失われるなかで、我々はもはや画面の向こうで苦しむ他者を見捨てることに対していかなる罪悪感も持たない。守られた場所から電子的な変換を通して描かれる画面上の画像によって他者を眺め、その戦い

や苦しみや喜びをたんに自分の欲望と享楽のための安全な消費物として喰らい尽くそうとする。けれども、本当にそれだけなのだろうか。メディアの向こうにいる他者は本当に、制御された安全さにとどまっているような存在なのだろうか。本章では、メディアが捨象しきれない、他者が持つどうしようもない制御不可能性について、バルトの写真論を手掛かりとして考えてみよう。

バルト (1985) は写真と他のメディアとを区別する最大の特徴を、メディアそれ自体の不可視性に求めている。絵画の場合、描かれた対象が実際に存在するかどうかは鑑賞者には分からない。むしろそこで鑑賞の対象となるのは、画家の表現であり、主観である。我々は描かれた対象ではなく、画家の作風を観ることが可能である。しかし写真を見るとき、我々は写真それ自体を見てはいない。絵画とは異なり、写真は被写体という存在そのものを写すことに意義があり、写真というメディアそのものは我々の目には触れない。

写真の撮影技術や、それが文化的なコンテクストのなかで何を意味しているのかを考察することは可能だろうし、また一般的に写真論で語られるのはむしろそういったものごとであるかもしれない。バルトはこれらの要素を「ストゥディウム (studium)」⁽⁹⁾と呼ぶ。しかし真の意味で我々に衝撃を与える写真は、このストゥディウムだけではなく、もう一つの要素も必ず同時に持っていなければならないとバルトはいう。それが「プンクトゥム (punctum)」⁽¹⁰⁾である。

一般的な関心を表すストゥディウムを超え、写真に写された被写体の存在が、このプンクトゥムとして我々に突き刺さる。文化的な意味づけや共有され

得る技法から逸脱したどこかで、被写体は我々にどうしようもなく迫ってくるのである。その共有し得ないプンクトゥムに自らを曝すということが、そこに写された被写体との出会い＝関係性の絶対的な固有性を顕わにする。

このとき、写真に写されたものは、もはや写されただけのものではない。「この陰鬱な砂漠の中で、ある写真が、突然私に到来する。その写真は私を活気付けた、私はその写真を活気付ける」(同書：31)。バルトはこれを「相互本来的 (co-naturel)」と呼ぶ。では、既に存在しないかもしれない被写体をこの私が活気付けるとは何を意味しているのか。

通常、写真においては、写真の画像とそれによって示される指示対象とは別けて考えられる。しかしプンクトゥムによって私を貫く写真は、そのときもはや写真の画像と指示対象とに別けられるようなものではなく、それ自体で私に迫るものとして顕現する。そのとき、写真はそこに写されたものに「それはかつてあった」というどうしようもない事実性

(バルトはそれを「御しがたいもの」と呼ぶ)を与える。したがってバルトにとって、プンクトゥムをともなつた写真とは、単に記憶を意味しているだけではない。「それはかつてあった」は、意味を超えたところにある存在それ自体への確信なのである。

しかし、この「それはかつてあった」は、狂気を含んだものでもある。その狂気とはすなわち、写真を前にした我々が感じる「どうしようもなさ」から起きるのではないだろうか。「それはかつてあった」。しかし、いまはもうない。それは我々に、人の死がそうであるようにいかなる意味づけも許さないものとして我々に突きつけられる。いかなる意味づけも否定される「それはかつてあった」の、無意味であるにもかかわらずどうしようもなく存在していると

いう事実には、それ自体で狂気が内在されている。

ここで改めて、メディアを通して現われる他者との関係性について考えてみよう。ソントグ (2011) は、『戦争に反対する戦争！』⁽¹¹⁾を例として挙げつつ、我々の倫理的態度について厳しく断じている。ソントグは、このような極度の苦しみを顕している写真を見る権利があるのは、「その苦しみを軽減するために何かができる人々」あるいは「それから何かを学べる者たち」だけであり、そうでなければそれは「覗き見をする者」(同書：44)だという。もし我々がそのような写真を前にしてその苦しみに感応した(と思いこんでいる)としても、それは結局のところ本物ではない。むしろそのような表面的な感応は、この私が画面の向こうで苦しむ他者に対して責任を放棄していることへの欺瞞と隠蔽に過ぎない。実際、メディアの向こうで苦しむ他者を前にして、我々は何もしていない。我々は苦しみを受けていない。我々は安全なところから出ようとしない。

しかし、繰り返して我々が気づかなければならないのは、「かつてそこにあった」すなわちいまはもう居ない他者が持つ、いまはもう無いにもかかわらず在り続ける絶対的な存在の確信である。

無論、バルトが語っているのは銀塩写真であり、ベンヤミンのいう複製技術としての銀塩写真よりさらに圧倒的に複製が容易であるデジタル写真は、彼の時代にはなかった。現代情報メディアのなかを大量に流れていくすべてが似たような写真は、我々に迫り来るどうしようもない迫真性、その存在への確信を失っていく。我々はそれを商品として消費し、興味もなく一瞥し、すぐに捨てる⁽¹²⁾。

しかしやはり、それだけではない。被災によって失われた写真をふたたび取り戻すことが大きな意味

を持つのは、そこに写されたものが——媒体が銀塩であれデジタルであれ——ブントゥムを失っていないことの一つの確かな明証なのだ。それは記録を貫き、記憶さえ飛びこし、怖ろしいまでの迫真性をもって、剥きだしの生そのものとして我々の眼前に突きつけられる。その怖ろしさは、ビッグデータの渦に捲きこまれたかつて人間であった何かが持つ不気味さとはまったく異なる。それは、徹底して固有であることからくる畏怖なのである。

3 固有性

インターネットがコミュニケーションの規模を地球規模にまで拡大したいま、我々は、我々がコミュニケーションする、徹底して固有である他者とは誰で在り得るのか——肉親なのか、近しい友人なのか、同郷人なのか、同国人なのか——について、改めて問う必要に迫られている。

現代情報メディアを通じたグローバルな関係性（特に人間と人間の倫理的な責任関係）を問おうとするとき、しばしばそれに対する拒絶反応として、ローカルな、直接的な対面関係にある他者との関係とは異なる——少なくともそこには責任の大小においてグラデーションがある——という反論がなされる。それがそのまま情報技術の否定につながるような浅薄な反技術主義というまでもないが、弱い紐帯などを持ち出しその利点を挙げるような議論にも、本質的な意味はほとんどない。いずれにせよ、そこに差異を前提とする主張には、ある種の暴力性がある。我々が遠く隔たれた、しかし我々の生活に密接に関わっている他者——これは抽象的な話ではなく、現代先進諸国に住む我々が、服を着て食事をとり、要するに一日をただ過ごすだけで、つねに既に現れている——に対する倫理的責任を問う際に、

この倫理的差異を持ち出すことは、端的に他者に対する責任の放棄でしかない。

いつの日か我々の生活が、我々の身体性の限界を超えないだけローカルなものに縮小できるとすれば——人間がコミュニケーションの拡大を求める存在である限り、歪でない形でそれを実現するのは極めて困難だと思われるが——そのときはローカルとグローバルの間に倫理的差異を前提とすることも正当化されるかもしれない。しかし、いまこの時点で世界がそうっていない以上、我々は、あらゆるものが数値化され比較演算できると信じている極端な功利主義者でもない限り、他者に対する倫理的責任のグラデーションなどについて言を重ねる前に（少なくともそれと同時に）、何よりもまず直截的に、グローバルな他者に対する倫理的責任関係そのものを探求する義務がある。現代情報メディアを通してなお残存し続ける人間性について問うことの意義はこの点にある。

本論の最初の問いかけに戻ろう。「フクシマ」や「絆」が現代情報メディアのなかで語られるということ、そこにはいったい何が示されているのだろうか。

苦しい中でも「絆」によって助け合う共同体の美しさ、あるいはどんな困難な状況下においても理性的に和をもって行動する日本人への海外からの賞賛。震災後から大量に流布されたそれらの物語が、ある一面において人びとを支えたことは事実かもしれない。しかし同時に、そこには先に述べたローカルな倫理主義を声高に叫ぶことに通底する、偏狭な心象が隠されている危険性がある。しかし我々は、そのような物語を大量に生みだし消費している裏側で、デマが垂れ流され、異様なまでの外国人蔑視に基づ

く誹謗中傷が飛び交ったのを忘れてはいない。被災地から離れた都心で、震災直後から物資の買いだめに走り、必要以上の商品を買ひ漁っていた自らの姿も知っている。現代情報メディアはその双方に作用し、乖離を拡大する。そしてそのあいだにも、史上最大規模の放射能汚染による被害は進行し続けている。

結局のところ、現代情報メディアは大きな矛盾を抱えている。それはここではないどこかに在る何者かと、いまここにいる私とをつないでくれるが、しかし同時に、その何者かを仮想化し、モニタの前という特権的な場に座る私の暇つぶしに消費するものにもしてしまう。その時点で、我々はいかなる意味においてももはや当事者などではなくなる。無論、ここでいう当事者とは、被災者あるいは被害者のことではなく、何らかのかたちでその被災者、被害者に対して責任を負っている者のことである。原理的にその責任を放棄することなどできるはずもないが、にもかかわらず我々はそのようにし、当事者であることから逃避する。そしてにもかかわらず、我々はあたかも自らが当事者であるかのごとく、「フクシマ」なる物語に特権性を付与し、我々のみがそれについて語る権利があるかのように振る舞う。

しかし何故それは特権的なのか。我々はチェルノブイリを知っていたはずだし、ボパールを知っていたはずだし、バンダアチェを知っていたはずだ⁽¹³⁾。無論、これは先の震災がありふれた、取るに足らないできごとだと言っているわけではまったくない。そのひとつひとつの（自然であれ人為であれ）災害が、それぞれに取り返しようのない、共約不可能な、無数のそれぞれにあるひとりの誰かの喪失から成っているという意味で、そしてその意味においてのみ、「フクシマ」は固有ではないのだ。そこで失われた

絶対的に固有な人間と人間のつながりは、「絆」などという言葉によって表現できる、優しく消化しやすい物語などでは決してない。

福島第一原子力発電所事故のあと、再びチェルノブイリが注目されるようになった。しかしそのとき、なぜ我々がこれまでの倫理の営みにおいてチェルノブイリを真の意味では見てこなかったのかを問わなければ、何の意味もないだろう。そうでなければ、我々は結局のところ「フクシマ」の消費を通してさらに「チェルノブイリ」さえ消費するだけのことになる。チェルノブイリの当事者が、私たちも日本に学ばなければならないというとき、それを聴く「フクシマ」の当事者ですらない我々が感じる心地よさは、世界がつながっていることから生まれるものではなく、一切のリスクを負うことないままに、自らが特権的な位置にあるという幻想に溺れている快楽でしかない。しかしそれは、我々が人間で在れるか否かという根源的な問いかけの前において、最大のリスクのみを負うことでしかない⁽¹⁴⁾。

おわりに

震災を通して、現代情報メディアの意義が改めて注目されるようになった。けれども、それは無条件に善なる人間性をつなげるようなものではないし、無条件に人びとの記憶（共同性の基盤）を代替するようなものでもない。SNS上での無毒化され痛みを濾過したありきたりの優しい言葉との戯れは、一見人間的に見え、実は人間から固有性を奪い、統計的に処理できるデータへと近づけていく。そうしてそれは、生々しい苦痛やわずらわしい他者を忌避する我々の欲望が行きつく先でもある。

被災地において、ある相互扶助的な共同体が生じる。その存在やそこで求められているものごとが、

Twitter や Facebook を通してまたたくまに拡散し共有され、思いもよらないところから物資が届き、人びとが集まってくる。その現場で出会った生身の人びとが共に汗を流し、声をかけ合い、助けあう。それは現実と仮想が交差するところに生まれる、ひとつの新しく美しい物語なのかもしれない。けれどもその他者との共同体において、語ることさえできない苦しみや醜さ、後悔や恐怖、要するにどうしようもなさ¹⁾が、語ることさえできないままに語られない限りにおいて、災害ユートピア（ソルニット 2010）は、結局のところまさにユートピアでしかない。それはすぐに失われ、その物語もやがて我々の暇つぶしのための安全な消耗品となる。

現代情報メディアは我々に何をもたらすのだろうか。もしそこに自由や解放、そして希望だけを求めるのであれば、結局のところ、我々は何も得ることなどできないだろう。そうではなく、他者とのつながりが本来的、必然的に苦しみや恐ろしさを内包していることを、我々は改めて想起しなければならない。

インターネットは確かに途轍もない規模でコミュニケーションを拡大した。そうして、それはただそれだけでしかない。我々は、ローカルかグローバルか、共同体か自立した個人か、現実か仮想かなどといった二元論に拘泥し、互いにユートピアを掲げて対立することの無意味さを知らなければならない。拡大するのはコミュニケーションの技術的な自由度の拡大であり、それは人間関係の自由度では必ずしもない。しかしその自由度の拡大には、避けがたいものとしての我々人間存在の本質的変容への予兆が隠されている。

情報技術はただ単純に我々により自由で開かれた関係を与えてくれるようなものではない。伝統的共

同体もまた、ただ単純に善なる人間性と相互扶助の精神によって支えられているわけでもない。それらが希望や救済として語られている限り、現実には、そのどちらもが幻想として我々を取り囲んでいる救いのない日常である。

他者とは、あらゆるメディア（媒介）を貫いて他ならぬこの私に迫りくる、絶対的な固有性を帯びた怖ろしいなにかである。そのあたりまえのことをあたりまえとして再認識することは極めて困難だが、しかしもし絆というものがあるのなら、それはその日常の総体を現実として歩み続け、そのなかに現れるあらゆる他者をこの私の他者として引き受ける覚悟の先にしかないだろう。

注

(1) ここでいう現代情報メディアとは、高速ネット回線等のインフラ、RFID や GPS、携帯電話やスマートフォンなどのモバイル端末、そして Twitter や Facebook 等の SNS などを総体的に含む広い概念として用いている。

(2) しかし同時に、我々はただ安穏と消費するだけの位置にいられるわけではない。美しい物語としての「絆」は、それに合致しないものごとを悪として排斥するか、より悪くはそのものごとの存在すら否定する。その圧力が我々自身に向くとき、我々は自身を悪として責め、あるいは必要とされていない者として苦しむことになる。

(3) また、紛失したものを持ち主に戻すために SNS が利用されていることにも注目すべきであろう。

2011 年 4 月 27 日のアメリカ中南部における大規模な暴風雨被害の折、ある女性が Facebook を利用して、風で吹き飛ばされてきた写真などを持ち主に戻すための情報サイトを作成したところ、多数の協力

が集まり、実際に幾つかのものが持ち主の下に戻ったという例がある（小林 2011）。

(4)『IT時代の震災と核被害』（2011：23-24）、あるいは高野他（2012：2-3）を参照。

(5)ビッグデータとは、「典型的なデータベースソフトウェアのキャプチャー、貯蔵、処理そして分析の能力を超えたサイズを持つデータセット」

（McKinsey Global Institute, 2011：1）を意味する。その特徴としては Volume（規模）、Variety

（多様性）、Velocity（速度）という「3つのV」が挙げられる。さらにこれに Veracity（正確さ）あるいは Value（価値）が追加されることもあるが、これについては改めて本文中で触れる。

(6)「ビッグデータとは「全データを解析の対象にするものだ」という誤解があることです。（中略）例えば地震予測のことを考えてみればいい。地震予測における全データとは何かというと、それは、過去から未来までの地震にまつわるさまざまなデータの総体のことです。当然ながら、それらをすべて解析の対象にすることはできません。未来は不可測だし、処理能力がいかに拡大しようとも、データの総体を処理しきれものではないからです」（西垣他 2010：48-49）。

(7)国立チェルノブイリ博物館の副館長であるコロレーヴスカが、資料の収集には「人と人との接触が重要」であり、「交渉し、信頼を得て譲ってもらわなければならない」と語っているのは印象的である（コロレーヴスカ 2013：94）。

(8)「情報技術の環境化」については、吉田（2014）を参照。

(9)熱意、研究、衝動、嗜好、愛着、慰めなど様々な意味を表すラテン語。バルトは写真が持つストゥディウムの機能として、「情報を与えること」、「表

象すること」、「驚かすこと」、「意味すること」を挙げている。

(10)刺すこと、突くこと、刺された小さな穴など様々な意味を表すラテン語。

(11)『戦争に反対する戦争！』はドイツの良心的参戦拒否者エルンスト・フリードリッヒによる写真集。ここでソントグが見ているのは、「戦争の顔」と題された、顔面に酷い損傷を受けた兵士たちの24葉のクローズアップである。

(12)ここで本論は写真と他のメディア表現とを同一の次元で捉えているが、バルトにおいては写真の独自性が前提されていることは強調しておかなければならない。しかし本論は、自己には決して理解しきれないものとして自己に内在する他者性こそが自己を生み出すのであり、そしてそれが他者への責任の原理であるという立場を取る。そしてバルトのいうプンクトゥムはこの主張に強い適合性を持つ概念と捉え、これをより一般的に、メディア全般にも適用できると考える。

(13)しかしこのように表現すること自体、既に我々がそれら個々の出来事の絶対的な固有性を剥ぎ取り、消費対象にし始めていることの表れかもしれない。それが「フクシマ」のように未だになっていなければ、それは皮肉にも、我々がそれらについて知ろうとさえしてこなかったからに過ぎない。とはいえ、名づけるということには別のかたちもある。ナンシー（2012）はアウシュビッツとヒロシマという二つの名を挙げつつ、それが「一種の脱・名称化（dé-nomination）」であり、一般に固有名が意味するのが「自分自身であり、その他のいかなるものでもない」のに対して、脱・名称化のために「これら二つの名が意味するものとは、意味の全滅^{サンス}なのだ」という。ここには、我々が対象を安全に消費するた

めに名づけることとは異なる名づけの在り方が示されている。

(14)誤解をしてはならないのは、固有性の主張は、我々が失ったあるひとつのそれを美化し、その災害を引き起こした構造的な問題から目を逸らすことを意味しているのではないということだ。そうではなく、我々はいかに耐え難くとも、それぞれが絶対的な喪失であることを引き受ける覚悟をもたなければならぬ。そうでなければ、我々は歴史から学ぶなどということは、ついにできないままに終わるだろう。

参考文献

- 荒金直人 (2009) 『写真の存在論—ロラン・バルト「明るい部屋」の思想』慶應義塾大学出版会
- 大黒岳彦 (2014) 「ビッグデータの社会哲学的位相」『現代思想』青土社, pp. 133-147
- 小林啓倫 (2011) 『災害とソーシャルメディア 混乱, そして再生へと導く人々の「つながり」』マイコミ新書
- コンピューターテクノロジー編集部編 (2011) 『IT時代の震災と核被害』インプレスジャパン
- 高野明彦・吉見俊哉・三浦伸也 (2012) 『311 情報学 メディアは何をどう伝えたか』岩波書店
- 西垣通・ドミニク・チェン (2014) 「情報は人を自由にするか」『現代思想』青土社, pp. 38-58
- 吉田健彦 (2014) 「環境化する現代情報技術と現実の変容—現実／仮想の二元論的情報観を超えて」総合人間学会編『総合人間学第8号』電子ジャーナル版
- A. コロレーヴスカ (2013) 「インタビュー04 責任はみなにある」東浩紀編『チェルノブイリダークツーリズムガイド』株式会社ゲンロン, pp. 94-97

- J=L. ナンシー (2012) 『フクシマの後に 破局・技術・民主主義』渡名喜庸哲訳, 以文社
- R. ソルニット (2010) 『災害ユートピア—なぜそのとき特別な共同体が立ち上るのか』高月園子訳, 亜紀書房
- R. バルト (1985) 『明るい部屋—写真についての覚書』花輪光訳, みすず書房
- S. ソンタグ (2011) 『他者への苦痛のまなざし』北條文緒訳, みすず書房
- "Big data: The next frontier for innovation, competition, and productivity", McKinsey Global Institute, 2011

吉田健彦 (東京家政大学非常勤講師)